

浄

monthly
JŌDO

土

June 2003

6



法然上人鑽仰会



昭和15年5月号



昭和15年7月号



昭和15年8月号



昭和15年10月号



昭和15年11月号



昭和15年12月号



昭和16年1月号



昭和16年2月号



昭和16年3月号



昭和16年4月号



昭和16年5月号



昭和16年6月号



昭和16年7月号



昭和16年8月号



昭和16年9月号



昭和16年10月号

浄土

2003/6月号 目次

人に歴史あり 普光観智国師	小澤憲珠	2
表紙のことば	永井健策	9
精神科疾患について	野木 渡	10
新連載「梵字」.....	真野龍海	16
新連載 バリアフリー考	白木 力	18
講演会のお知らせ		20
会いたい人 渡辺えり子③	関 容子	22
響流十方	袖山榮輝	30
「代替医療」という世界	井上朝雄	34
民話をたずねて	石崎敬子〈絵石川忠夫〉	36
Jフォーラム		43
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
新連載マンガ「さっちゃんはネッ」.....	かまち♡よしろう	47
編集後記		48



表紙題字=浄土門主 中村康隆 祝下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

人に歴史あり

普光觀智国師

大正大学教授

小澤憲珠

(一)

普光観智国師とは、慶長十五年（一六一〇）に後陽成天皇より増上寺第十二世の源誉存応に与えられた国師号である。国師とは一国の天子の師と仰がれる高僧という意味で、朝廷から与えられる称号である。国師号は鎌倉時代に禅家に与えられたのが最初であったが、浄土宗の僧侶としては存応は二人目である。これは徳川家康の念仏信仰と存応に対する熱い帰依があったことも無関係ではない。存応と家康はほぼ同年代であり、増上寺で家康の葬儀をつとめた四年後に七十六歳で入寂している。

存応（一五四四—一六二〇）がこの世に生をうけたのは室町時代の末期、いわゆる戦国の世である。記事は武蔵野国多摩郡由木（現在の八王子市柚木）で、由木利重の次男として生まれるが、五歳のときに利重は戦死している。

出身の由木氏は鎌倉時代よりつづく関東における部門の家柄であった。由木氏の祖は鎌倉幕府から戦功により、柚木、大澤、遣水、片山、長沼、打越、中山、堀内、落合、別所、松本等の二十五ヶ村を賜ったとされる。これらの地名は現在も八王子市に残っており、八王子の東南に広がる地域である。曾祖父のときから小田原北条氏に属しており、父の利重も北条氏政に仕えていた。北条氏はやがて豊臣の軍勢に滅ぼされることになるが、由木氏

一族もその運命をともしることになる。

存応の出家の動機は不明だが、十歳のときに武蔵野国新座郡片山の法臺寺の慈円のもとで出家しており、慈昌と名付けられる。この寺は念仏宗であつたが、当時は時宗であつた。

織田信長は桶狭間の戦いで勝利をおさめて天下に頭角をあらわすようになるが、その翌年十七歳のとき、鎌倉岩瀬にある大長寺の存貞の門に入り、存応と名のるようになる。師の存貞は後に増上寺第十世の住持になっているが、存応の生涯の師といえる人物で、浄土宗の勉強はここから始まることになる。

世上では、織田信長が覇権をにぎるかと思えた矢先に本能寺の変で敗死する。やがて時代は豊臣氏へと移つて行く。この頃、存応は三十九歳でかつて師が住持をつとめていた鎌倉大長寺の住持になり、さらにその翌年の天正十二年（一五八四）、四十歳で江戸豊島郡貝塚にあつた増上寺第十二世の住持に就任している。増上寺は一三九三年に聖聰によつて開創され、第九世の貞把、第十世の存貞の代には学問僧の集う寺として、また江戸における念仏布教の中心的存在であつた。しかし当時は鎌倉の光明寺が関東の本山的な立場にあつた。

存応にとって転機となつたのは、天正十八年（一五九〇）である。存応が四十九歳のときである。この年に徳川家康は江戸入りをし、存応と出会つてゐる。そのきっかけとなつたのが豊臣勢による小田原の北条氏攻めである。相模から武蔵野国一円に勢力を持つてい

た北条氏は、豊臣氏の全国制覇に障壁となっており、小田原城はその要となる城であった。天正十八年はその小田原城が落城し、北条氏が滅亡した年である。小田原攻めに参陣した家康は、豊臣秀吉により三河から江戸へ領地替えを命ぜられ、存応と会うことになるのである。

また天正十八年は、存応の出身である由木氏が滅亡した年でもある。由木氏が本拠とする八王子には、北条氏照を城主とする八王子城があった。小田原城が落城するほぼ一カ月前、豊臣方の上杉景勝、前田利家の連合軍によって八王子城は落城してしまう。この合戦には存応の叔父の氏成、兄の重良も加わっているが、討ち死にしている。

家康が江戸へ入った頃、江戸には二十数ヶ寺の浄土宗寺院があったと思われる。三河では浄土宗の大樹寺が松平家の菩提寺であったが、江戸城の近くの増上寺が家康の菩提寺となる。伝説によれば、江戸入りした家康を乗せた馬が増上寺の門前で突然立ち止まってしまったという。門前に立っている僧侶の名を家来に尋ねさせると、増上寺の住持、源誓存応であると答えたという。家康はその翌日に増上寺を訪ねる約束をした。次の日家康は身内を滅ぼした敵方の将である。戦国の世の定めを胸におさめての両者の出会いであつたろう。豊臣秀吉が死去するのは慶長三年（一五九八）である。この年に家康は江戸城の拡張へのりだし、それにもない増上寺は貝塚より現在の芝へ移転することになる。その後、関ヶ

原の戦いをへて、慶長八年（一六〇三）、家康は江戸に幕府を開く。二年後には將軍職を秀忠にゆずり、自らは大御所として天下にらみをきかせることになる。この頃に増上寺の七堂伽藍がほぼ完成している。

(二)

慶長十五年（一六一〇）、存応は上洛して後陽成天皇より普光親智國師の号を勅許されている。これには家康による朝廷への再三の働きかけがあつたようである。ところで、存応が増上寺へ入るずっと前、修行時代に野武士のために身ぐるみ剥ぎとられ途方に暮れているところを助けてくれた人物がいて、四十年ぶりに國師はその人物と増上寺で再会したという話が伝えられている。

文化十一年（一八一四）に出版された『遊歴雜記』という書物がある。これは水道端にあつた郭然寺の隠居僧で十方庵敬順が、江戸市中や近郊を訪れた先々で見聞した様々なことをまとめたものである。その中に「浅草穢多半右衛門が遺緒」がある。その一説にこのようにある。

されば此郭の内（浅草新町）に住る穢多半右衛門というものあり、先祖多半右衛門以来、増上寺へ出這入して、僧正の代替りには目通りして、玄米拾俵と鳥目拾貫文を拝受し、

猶観智国師以来、代々増上寺の住職の名号残らず半右衛門方に所持して、一代も闕く事なく、家名今もつて相続せり。(原文ママ)

この記事が事実とすれば、この時すでに観智国師の時代より二百年も経過している。將軍は十一代の家齊であり、増上寺は第五十五世の薫誉在禪の代である。浅草新町に住む半右衛門の先祖の半右衛門こそが、実はその若き日の存応の窮地を救った人物なのである。半右衛門の生業については触れていないが、弾左衛門の配下で、差別を受けていた存在だったに違いない。

『遊歴雜記』によると、存応が野武士におそわれたのは、天正年間で、武州足立郡の草加宿と千住駅の間であったという。おそらく存応は三十歳を過ぎた頃で、師僧の存貞が死去し、足立郡の与野の長伝寺に閑居し、また江戸の増上寺へ勉強に向向していたときであろう。

丸裸の存応をみて、年の頃四十過ぎの男性が委細を聞き、自分の布子を着せてくれ、親切にいたわりながら千住まで同道してくれた。別れ際に、実は私は浅草の猿屋町あたりに住む半右衛門という者ですが、その姿では江戸へ入ることはできないでしょう。拙宅へお越し下さい。袈裟、衣類を調達いたしましょうといってくれた。存応はこの言葉にあまえて浅草の居宅へ逗留すること十四、五日におよび、出立のときには袈裟、衣、着類、路用にいたるまで用意してくれた。存応は深く謝して別れたが、半右衛門とその後会うこともなく年月は過ぎた。

存応が半右衛門と再会したのは国師号を賜ってからである。今も浅草に存命と聞いて増上寺に招いたのである。半右衛門はすでに八十歳をこえ、歩行もおぼつかない老人で、記憶も定かではなかったが、昔の恩義に報いるために玄米百俵と鳥目三十貫文を与え、また形見として六字の名号を書き与えた。

以後、増上寺では住職の代替りの度に歴代の名号、玄米拾俵、鳥目拾貫文を浅草の半右衛門方へ届けるようになった。また増上寺で非常のおりには半右衛門方より人足が出るようにもなり、さらに半右衛門と名乗れば、何時でも増上寺の出入りは自由であったという。文化十一年の『遊歴雜記』が伝える話である。

大坂冬の陣、夏の陣によって豊臣氏は滅亡するが、その翌年の元和二年（一六一六）、徳川家康は病に伏し、存応は駿府に家康を見舞っている。同年、家康の葬儀が増上寺で執り行われるが、存応はその導師をつとめている。その四年後の元和六年（一六二〇）存応は七十六歳で入寂する。

6

月

◆表紙のことは◆

運

心
象
書
道永
井
健
策

「運」と言う字は不思議ですね。

ただ単に運と言えば巡り合わせと言うか自分の力ではどうにもならない抽象的なことなのに、他に何かが付くと運動、運送、運用。非常に抽象的になって来るんですね。

「運」(うん、はこぶ)を書いている内に、でんでん虫になっていました。

でんでん虫も一生懸命、

我が身を運んでいます。

「運」が何故「でんでん虫」なのか解りませんが、解らないながらも何となくそんな気がして来るのが、運の字の面白さかも知れません。

(ながいけんさく)

昭和20年群馬県生まれ。中央大学法学部卒業後、読売広告社に入社。企画セクションに配属され16年在籍した後、自動販売機製造メーカーのサンデンに転職。販売企画の仕事を16年続け、平成11年に独立。会社を設立し、新規事業に取り組んでいる。趣味で始めた「心象書道」が趣味の世界を超え、展覧会を開くまでになっている。

精神科疾患について

浜寺病院 副理事長

野木渡

小生、医師になり精神科を専攻してから約15年が経つ、医師としては中堅どころではあります。精神科としてはまだまだ修行のいる段階であります。医師のなかでも精神科医と言くと、最近でこそ少しは減りましたが、それだけで変わった先生と見られることが多く（事実、ユニークな先生が多いが）、飲み屋に行こうものなら「私の心を読んで下さい。」「催眠術をかけてみて……」など言われることが度々ある。精神科医というだけで、いまだに神秘的な世界やマジック的な世界を連想される方がたくさんおられるように見受けられますが、少なくとも私の周りにいる精神科医で、一目見ただけで相手の心を読める人もいないし、テレビみたいに一瞬に催眠術をかけることの出来る人もいません。

さて、一概に精神疾患といっても多くのものがあり、代表的なものだけでも統合失調症（精神分裂病）、気分障害（躁うつ病）、神経症、人格障害（性格障害）が挙げられます。各疾

患について簡単ではあるが、概要を述べてみましょう。

統合失調症（精神分裂病）は出現頻度約0.7%（人口約150人に1人）といわれ、主として思春期（大部分は思春期〜30歳頃）に自我障害・思考障害（妄想など）等の精神症状をもつて始まり、慢性的な経過の後に感情鈍麻・意欲減退・思考のまとまりの悪さ・自閉等へ至る疾患です。発病原因は不明ですが、発病や症状の悪化に何らかの精神的要因（ストレス）が関係することが少なくないといわれています。病状悪化時（急性期）には、「命令してくる声が聞こえてくる」「悪口を言われている」「誰かに見張られている」「自分の考えが周りに伝わる。」などの幻覚・妄想・自我意識障害が出現し、興奮状態、まとまりのない不可解な言行動、引きこもりなどを呈することがあります。但し現在、薬物を中心とした精神科治療が進歩し、早期に治療を開始することにより、多くの患者さんが社会復

歸されています。

気分障害（躁うつ病）は出現頻度約0.5%（200人に1人）といわれ、躁状態とうつ状態を呈するものです。躁状態とうつ状態の両方を呈するものと、一方の状態のみ呈するものがあり、うつ状態のみを呈するものが最も多いようです。また、元来の性格傾向に社会的、ユーモア、情け深い、或いは几帳面、仕事熱心、凝り性、責任感が強い傾向があるといわれています。統合失調症と同様に発病原因は不明ですが、精神的要因（職務移動、昇進、降格、引越、身内の死亡や病気など）が誘因として働くのではないかと考えられています。

躁状態（躁病）は感情の高揚が基本症状とされ、気分高揚、自信満々（尊大）、多弁、多動、疲労感の減弱、睡眠時間の短縮となり、「大発見した」「株で大儲けができる。」など誇大的思考、或いは考えが次から次へと沸き起こるも話が横道に逸れ、論理的な思考連合が

できなくなる等の症状が出現します。また、言行動に抑制がきかなくなるため、浪費、他者への過干渉などのトラブルが目立つこともあります。

うつ状態（うつ病）は抑うつ気分を基本症状とし、悲哀感、自信喪失、活動力低下、自発性減退、易疲労性、食欲減退となり、何事にも悲観的となり「億劫で何もする気がしない」「生きていても仕方がない」「自分はつまらない人間だ。」など物事を悪い方ばかりに解釈する傾向にあります。思考のテンポが遅くなり考えの進行が遅いため、ボケてしまったのではないかと周りが思う場合もあります。不眠、頭痛、口渇、便秘、動悸などの多彩な身体症状が見られることがあるのも特徴です。また、抑うつ気分が目立たず、イライラ感や自殺観念が強くなるタイプもあるのが注意が必要です。うつ状態の患者さんには、病気が必ずよくなることを説明し精神的負担の軽減を行うこととし、激励や気晴らしのた

めに旅行に誘い出すなどはいい方法であり、滝うちや修行などの行動は、かえって精神的負担を増強させることになるため絶対に避けるべきです。わかりやすく言えば、うつ状態はガソリンの切れた自動車であり、燃料（精神的エネルギー）を補充しない限り動かない。無理に動かそうとすることは、負担を大きくするばかりで、悪くする一方なのです。

但し、気分障害も薬物療法が進歩しており効果を上げています。特にうつ状態に対しては、近年さまざまな抗うつ剤が開発されており著効することも稀ではありません。

神経症は精神的要因（ストレス）によって精神的或いは身体的症状が引き起こされた状態をいいます。人は社会生活を送る上で、さまざまなストレス（精神的要因に、遭遇し、これらのストレスに対し種々の心的機制（適応機制）が働き、ストレスを解消していくため精神・身体症状が現れることはほとんどありません。しかしながら、これらの心的機制

（適応機制）が働いたにも関わらず、ストレスが解消されない場合に精神・身体（神経症）症状が出現するということです。

神経症は他者から見れば些細なストレスでも発症する可能性があり、症状が出現する過程においては元来の性格傾向が大きく反映される。例えば、『学期末試験前（ストレス）になっても、A君は元来呑気で、勉強が進んでおらず、そのことが気になりながらも、ストレスを無意識のなかに閉じ込めてしまうという抑圧（心的機制）が働き、好きなテレビ番組も見ってしまう行動がとれ（症状として現れることがない）、かたやB君は元来神経質で、勉強が進んでいるにも関わらず、試験を直前にし、落ち着かない、不安、不眠、動悸などの精神・身体症状が出現する。』というふうなことです。また、神経症の中核をなすのは不安であり、この不安がそのまま現れる場合と不安が加工されさまざまな精神症状或いは身体症状が出現する場合があります。

具体的には、不安神経症—不安、動悸、呼吸困難感、手足のしびれ等。恐怖（神経）症—特定の対象（高所、閉所、不潔など）に対する不安と恐れ。強迫神経症—無意味である理解しながらも繰り返さずにはおれない特定の行為や思考（手洗いを繰り返す、目に触れるものすべてを計算する等。神経衰弱—身体疾患がないのに倦怠感、易疲労性、頭痛、集中力低下などの症状が持続します。

治療は安定剤等薬物の併用も行いますが、支持的療法（心理的アプローチ）が主体となります。基本的には精神的要因（ストレス）が軽減されるか消失されることにより、症状は軽快或いは消退する為、精神科医以外の知識人や宗教家による暗示や（共感的）経験談・人生論などにより軽快することも多々あります。

最後に人格障害（性格障害）ですが、性格の偏りが思春期以後、或いはそれ以前から成人期を通じて恒常的に認められ、それら

が社会に不適応（他害）となるか、或いは自己の悩みになる（その異常性のために自分自身が悩み、あるいは社会が悩むもの）ことをいいます。近年では大阪の池田小学校事件でも話題になった疾患です。

具体的には、妄想性人格障害—十分な根拠もないのに、他者に対する広範な不審と疑い深さ、軽蔑を許さず、他者を恨み続ける。反社会性人格障害—人間的な感情や倫理観に乏しく、反省なく他害行為を繰り返す。依存性人格障害—面倒をみてもらいたいという広範で過剰な欲求があり、従属的ですがみつく行動をとる、などがあります。

治療は、その性格に自身が悩む場合は種々の療法（支持的アプローチ、内観法や宗教的アプローチ等）や環境調整により治療を行うが、それ以外の場合の治療は困難です。

では次に、どのような場合に精神科医に相談すべきか？という点になりますが、ごく簡単に言うならば、対象者の言行動が了解（納

得)できるものか?了解(納得)できないものか?という点にあると思います。例えば、「明日、地球は爆発します。」と根拠もなく言ったり、話している内容がまとまり悪く意味不明、お金持ちの人が「このままでは貧乏になる。」と根拠なく言ったり、意味もなく興奮しているような場合は、明らかに了解できません。これらの了解できないものの中には、幻覚や妄想が含まれており正常な判断が出来ない(混乱状態)可能性があり、早期に精神科医に相談する必要があると思います。

逆に、「サラ金に大きな借金があり、家を取られてしまう可能性がある。」或いは「吊り橋は揺れるので、転落するかも知れないので渡らない。」などは少し大げさではあるかもしれませんが、本人の気持ちになつて考えてみれば了解可能(神経症的)なもので、本人が望まないのであれば無理に精神科医を紹介する必要はないと思われます。

最後に釈迦に説法かもしれませんが、我々

精神科医は『基本的には患者に対して真剣な関心を持つこと又その事が患者さんに伝わるように心がけること、共感的理解・支持的态度を基本とすること』或いは『無条件な肯定的関心』ともいわれる様な対応を教育されております。患者さんに接するときはこれらのことを常に心がけるようにしております。これらは一般社会においても良好な対人接触姿勢になると考えます。

以上、ごく簡単に精神科疾患について述べてみました。

野木 渡

昭和36年生まれ

現職 医療法人社団微風会 浜寺病院

理事長(大阪府高石市)

昭和61年川崎医科大学卒業 同大学精神医学教室入局

平成元年浜寺病院就職

平成15年同病院副院長・副理事長就任

現在、大阪府精神病院協会理事 大阪府医師会看護学校講師他

新連載

『梵字』①

日本語アイウエオは

仏教の

梵字から

真野龍海

ア



イ



ウ



エ



オ



日本語のアイウエオ、英語で言うところのファベットは、仏教がインドから運んで来て、仏教で使ってきた文字の順によって、お坊さんが日本語に合わせて作ったものです。

日本では、小学校に入學すると、まずこのアイウエオから学んでいきます。みなさんも、あの楽しい入学当時の思い出と共に、習字でも習ったことを墨の香りともども記憶に消えないことでしょう。しかし、アイウエオが仏教の、お坊さんの努力でできたことは、小学校ではもちろん、中学でも、はては大学でも教わったことではないと思います。この文化が日本語に使われていることが知られていないのは残念でもありますし、日本人としても、いな、世界の人にも知ってもらいたいものです。

お坊さん方は昔から、仏教を学ぶ必須科目として、このインド伝来の梵字を習ってき

ました。特に師匠から弟子へと直々に弟子は対面して相伝をしてもらわないと認められないくらいに重要な必須科目と今もされています。

梵字はインドの言葉ですから、日本語ではない文字や、多少発音が出来ない文字もありますが、日本語に合わせた梵語の文字順によって、日本語のアイウエオを作りました。

梵語はインドの言葉ですが、さらにその源は、インド・ヨーロッパ語と言われて、ヨーロッパとアジアの中間くらいの地域にあったようです。従って英語・ドイツ語・フランス語などと同じ系統です。梵語の中には、それらの国語と似た言葉がたくさんあることに私たちは気がつきます。

新連載

「バリアフリー考」

第1回（全8回予定）

撮影／

白木カ

バリアフリーデザイン研究会事務局長
一級建築士／インテリアプランナー

写真／

丸山カ

バリアフリーデザイン研究会会員
歩行者・電車空間デザイナー

エレベーター、 エスカレーター、 階段



利用者からすると、どれが一番優先されるのだろうか。それぞれ文明の利器だからといってしまえばそれまでだが、高低差を克服する道具として機能は確かに違う。ちなみに3つからイメージされるものを考えてみた。筆者にとってエレベーターとエスカレーターは百貨店、階段は学校である。いずれもインパクトのあった初体験の場所だ。これらきつと一人一人違うはずだが、利用者からすれば日常的に利用するところにあつてほしいのは、一番便利(高価)なもの。サービス側からは後回しにしたいものが、やはり高価(便利)なものだ。なんとも大きな意識の違いを感じる。こう考えると、利用者の一人として、どこにでもあつてほしいと願うのはエレベーターかエスカレーターに決まっている。こんな自然な発想が何事も大切だろう。この視点はどこでも通用する考え方だと思う。ところが、バリアフリー(垣根をなくす)的発想から見

ても実情はお寒い。利用者感覚欠如なのだ。ともかくお年寄りや車いすや乳母車の使いやすさよりは、サービス側の論理が優先している。だから、当然エレベーター、エスカレーターは最後の最後になる。元気なときにしか便利と感ぜない階段が優先されるのである。これで何とかやり過ごせないかと言いつくえ。情けない話だ。ところが欧州の駅に行くと、3つ全部がそろっているのに目を奪われた。当地の関係者は、そうしないといけないと思つてゐるふしがある。だから、一生懸命、それにカツコいいガラスで透けたエレベーターも当たり前なのである。とにかくうらやましい限りだ。

できるだけ早い時期に、日本でもエレベーターと階段くらいは、どこに行つても一緒にそろえるのが当たり前になつてもらいたいものだ。

法然上人鑽仰会
講演会のお知らせ

江戸庶民と お寺

講師

田中優子

(法政大学教授)

日 時 平成 15 年 6 月 27 日 (金曜日)
午後二時より三時半まで
場 所 浄土宗大本山増上寺 慈雲閣
東京都港区芝公園 4-7-4 03-3432-1431
都営三田線／御成門駅下車徒歩 5 分
都営浅草線、大江戸線／大門駅下車徒歩 7 分
JR 線／浜松町駅下車徒歩 10 分
会 費 一般／千円
会員／無料 (ともに予約不要)

講師プロフィール／たなか・ゆうこ

法政大学社会学部教授。専門は日本近世文化・アジア比較文化。近世文学（江戸時代の文学）を専攻するがその後、研究範囲は江戸時代の美術、生活文化、海外貿易、経済、音楽、「連」の働きなどに広がってゆく。さらに、中国文学を中心に東アジアと江戸の交流・比較研究、布や生活文化を中心にインド・東南アジアと江戸の交流・比較研究などにおよんでいる。江戸時代の価値観から見た現代社会の問題に言及することも多い。TBS テレビ『サンデー・プロジェクト』のコメンテーターでもある。

主な著書は、『江戸の想像力』（筑摩書房・1986 年度芸術選奨文部大臣新人賞）『江戸の音』（1988 河出書房新社）『近世アジア漂流』（1990 朝日新聞出版局）『江戸百夢』（2000 朝日新聞出版局・2000 年度芸術選奨文部科学大臣賞、2001 年度サントリー学芸賞）『江戸の恋』（2002 集英社新書）

連載

渡辺えり子^{さん}③

会いたい人
関 容子



撮影／タカオカ邦彦

えり子さんが「劇団300」の旗揚げをしたのは弱冠二十三歳のときだった。

「北朝鮮に拉致された地村さん夫妻が二十三歳のときだったと聞くと、他人事とは思えませんがね。私が二十三からこれまでに出会った人、やった仕事のことを考えると、気の遠くなるほどいっぱいあるわけでしょう。その歳月がボーンとなくなったら大変なことだけど、でもあの人たちも北朝鮮で確実に生きてきたんだから、あの何十年間は空白の刻……なんて言うってちやいけないうるんではないかと、考え方は甘くはない。

劇団名は最初は200にじゅうまるだった。地球を一周の円と考え、それよりひとまわり大きくて、既成概念を追い払うような自由な集団にした、というのがその由来。

「それと、一回見ただけでは読めない名前にして、一回憶えたら絶対忘れない名前にしようと思ったんです。活字になったときは数字に目が行くし。でもこれは途中で空中分解す

る名前だから300になさい、とおっしゃったのが美輪明宏さん。美輪さんのお弟子の藤堂君が、私たちの旗揚げ公演に出演したのを観に来て気に入って下さって、衣裳や小道具を貸して下さったり、稽古場がないときは美輪さんの広い部屋を提供して下さいたりしたんです。それで姓名判断を真剣に信じたわけではないですけど、そのころいろんな事故が続いたので、縁起がよくないのかな、ということ、次の公演から300に改名しました」

旗揚げ公演の演目は、渡辺えり子作、演出、出演の『モスラ』。見えない怪物の象徴モスラに人々が翻弄されて大騒動が起る。

「そのころ由起さおりが『東京バビロン』という歌を歌ってるんですが、東京が崩壊するというすごい歌詞なんです。その曲をテーマに使ったり、またその年久々にヤクルト・スワローズが優勝したので、作り物の燕をシューッと横切らせたりしたら大受けでした。切符は当時のバイト先のお客さんたちに買って

もらってたので、アングラなのに紺のスーツ着た人がいっぱい入ってて、公演のたびにお客が倍、倍に増えて行きました。

その度にアンケートがまた面白くて、それに影響されて次を書くくらいがありました。たとえば、キューブリックを思わせる手法、とか書かれて、それから『二〇〇一年宇宙の旅』を観に行ったり、フェリーニの世界に似てる、とかいうのもあって、そしたら美輪さんが、フェジュリコ・フェリーニ・ヤマガタ（ジュリコは当時のあだ名）、って（笑）

劇団旗揚げから十数年、えり子さんにはたくさんの人との出会いがあり、仕事も日に日に充実の度を増してきた。ところが結婚となると、なかなかいい相手が現われない。

しかしえり子さんの夫となる人は、意外に身近なところにいた。

「土屋良太君は、私が主宰する無人塾の第一期生を募集したとき、面接に来たんです。パ

ントマイムがうまくてなかなか面白い芝居をする人だな、という印象しかありません。早稲田大学ではずっと劇研にいて、野田秀樹さんの芝居が好きだったみたいですが、うちを受ける前に松尾スズキさんの大人計画おとなを受けて、入ったんですよ。でも稽古場に行って、これは合わないなと思ってやめて、今度はうちとか青年座とか三つ、受けて、受かって、迷った末にうちへ来たと言っていましたね」

劇団内の恋愛を固く禁止していた座長のえり子さんと、ひと回り下の羊年だという若い劇団員とは、どう接近したのだろう。

「私が大失恋したんですね、エリート銀行員に。まだデートしてたころ、私が風邪ひいて行かないと土屋君が代りに行って、今風邪ですけどえり子さんは白馬にまたがった王子様を待ってるんですよ、それがあなたなんですよ、とか言ってくれたらしいんです。でも結局失恋に終って、気の毒に思ったんでしょうね。義憤に燃えて私の部屋に来て、あんなやつよ



47歳（2002年6月本多劇場）“宇宙堂” 第2回公演「詩のしの詩」舞台にて



47歳 テレビドラマ「示談交渉人 甚内たま子2」の一コマ

りよっぽど自分のほうがいい、って酔っぱらって、襲われちゃって私が（笑）。向うは新潟の佐渡出身で私は山形で、二人とも固くて純粹培養みたいなものですから、そうなたら結婚しようということに。その出来ごとが十二月二十八日で、翌年一月七日の私の誕生日にはそう決めて、その年の七月七日に籍を入れたんです。劇団内の恋愛禁止を私が破るんですから、みんなにわからないように交際して、もうロメオとジュリエットみたいに激しく燃え上りましたね。結婚後はそれでもなくなりましたけど（笑）。」

結婚披露のパーティーはその翌年、平成八年六月九日、六本木のアメリカンクラブで行われ、私も招んでもらったが、その超ぜいたくで奇抜な演出が、今も語り草になっている。

まず黒紋付の花婿は芝居の馬に乗り、その手綱を取るのが勘九郎さん。リヤカーに米俵を積み上げた上に花嫁が座り、手を取って介添するのが勘九郎夫人の好江さん。

「あれは二人とも地方の出身だから、笑わせ

るような形で出てこよう、というので、米どころだし、洒落で米俵の上に乗ったんです。

勘九郎さん夫妻は立会人ですね。そのあとお色直しのウエディングドレスで歩く道に絨毯を敷いて、介添してくれたのが染五郎さんと牧瀬里穂ちゃん。よくやってくだすったなと思います。ステージに白石加代子さんと李麗仙さんと緑魔子さんが上ってくれて、そのとき上演中の『女の幸せ』という芝居の、結婚についての一節を演じてくれたりね。とにかく両方の両親や親戚がみんな来たいということで、じゃそういう人たちが喜ぶような人をお客さんに招ぼうと考えて、それまで交流のあった人六百人くらいに声をかけたら、旅公演の人以外はほとんどが出席してくれましたね」

あのととき劇団300総出演で演じられた、二人が結ばれるまでの寸劇は傑作だった。花婿の役どころは先輩たちのやかみのせいかな、かなり喜劇的な味つけが濃かった気がしたが。

「私は威張って怒鳴る女座長役でしたね。ちょうど四十歳で結婚したんで、あんなことができたんですね。年がいつってから結婚するのでもいいものだなあ、と思いました。

あてがはずれたことは、監事役が会費一万円にしたことで、一万円と書いても結婚式なら三万円は持つてくるから大丈夫、なんて言っただけ、持つてきませんでした（笑）。おかげで三百五十万円の赤字でした。

それと寂しいのは、結婚した途端に男の友だち誰からも電話がかかってこなくなったこと。やっぱり遠慮しちゃうんでしょかね。結婚しても変らずにつきあってくれる男の友だちは勘九郎さんと……、ホモの方々ですね（笑）」

えり子さんの戯曲の根底にある一つの流れとして、弱者の側に立つての反戦のテーマがある。しかも芝居を書くだけにとどまらず、今回イラク戦争での日本のアメリカ支持に反対して、小泉首相に直訴状を手渡そうと、国

会前まで出かけて行くという行動派でもある。「直訴して逮捕されてもよかったんですけど（笑）、仕事の約束が果せなくなるのでやめて、手続通りに抗議の手紙を置いてきました。でも一日に一万通首相宛の手紙がくるそうですから届きますかね。でも、イラクの子供たちの飛び出た内臓が見えるようで、たまらないんです」

えり子さんが正面から戦争を見つめた作品に『光る時間』があり、これは父親から聞いた話に基いているという。

「戦争によって負う庶民の傷と感覚を書きたいと思ったんです。父は十二、三歳から旋盤工として武蔵野の中島飛行機で働いてました。あのころ少年は予科練に入るか満州に行くか軍需工場で働くか、しかなかったんです。それで父は軍需工場を選んで、とりわけ戦争という実感もなく働いていたそうなんです。ところが友だちが目の前で爆撃で死んで、急に戦争が現実になってきたんですね。それでいよいよこの工場が明日の上空襲で全部壊滅



46歳（2001年3月）スイートベイジル139でのライブ風景

する、と言われたときに、全員避難するわけにはいかなくて誰かが工場に残って守らなきゃならない。誰が残るかという会議は、つまり死ぬ人を選ぶことなんです。すると、あいつは十人兄弟の末っ子だからとか、あいつは頭が悪いからとか言い合うんですけど、でも優秀な人間が残らないと何かあったときに咄嗟の判断がつかない。みんながゆずり合って、醜い会議になりかかったときに、父はたまらなくなつて、自分が残ります、って手を挙げたんだそうです」

すると二人の友人が自分たちも残ると言ってくれて、三人で無人の工場を守って一夜を明かすことになる。

「臓物が口から飛び出るような恐怖を体験した、と父は言っていました。そのとき高村光太郎の『必死の時』という詩を口ずさんだら、心が落着いた、と言っていました。父は今でも毎年一月二日の光太郎の連翹忌れんぎょうきには上京して、日比谷の松本樓の集りに出ていますけど、少年のころからそんな身近に光太郎の詩があっ

たんですね。それで結局、米軍の爆撃失敗で工場は助かって、父たち三人も命拾いをしたんです。その話を私が父から初めて聞いたのが三十過ぎてからで、それから構想十年くらいで書きました。自分の劇団では若手ばかりなので、演劇集団「円」に頼まれたときに書いたんですね」

えり子さんは、今さら封建時代はいやだけど、今も地方に残っている、心と心がコミニケイトして、お互いを大切にしようという感覚に戻りたい、とつくづく思う。

山形のお父さんが『光る時間』の舞台を観て涙するのに感動したり、結婚式もまず両親が喜ぶようにと企画するえり子さんは、伝統的「孝行娘」だ。

「損得ばかり考える時代になると、演劇も先細ってくると思うんですよ。想像力がなくなる、ってことですからね。想像力は人間が持つて一番面白いところだと思うんで、その想像力を耕すような、今後もいい芝居をして行きたい、と思っているんです」
(おわり)

響流十方こいうるじっぽう

舍利弗しゃりほつ。汝が意いにおいて如何。かの仏を何が故ぞ阿弥陀と号したてまつる。舍利弗、かの仏の光明無量にして、十方の国を照らすに障礙しがいする所なし。この故に号して阿弥陀とす。

『阿弥陀經』

舍利弗よ。そなたはどう思うか。なぜ西方極樂世界の仏を「アミダ」（無量）と呼ぶのであろうか。舍利弗よ。この仏は無量の光明を放たれ、何の障害もなく十方のあらゆる世界を明るく照らす。それゆえ、この仏を「アミダ」と呼びするのである。

光明無量の源は

「電気消して行く？」と妹。

「ううん、点けといて。誰もいない家に一人で帰るのが淋しくって、点けておくのが癖になっちゃったの。テレビだって、点けっぱなしで出かけることがあるんだよ」と姉。

「姉ちゃん、分かった。でも昼間だから、一つだけ点けておけばいいよね」

新緑の中、ご自宅の仏壇の前で営まれたある法事。法要を終え、戸締まりをし、これから参列者全員でお墓詣りに行くこうという時の会話である。

この日は姉のご主人の一周忌。子宝にこそ恵まれなかったご夫婦であったが、誰からも親しまれ、親類や近所の方々とは和やかに暮らし、そしてご商売には人一倍精を出した。何かと人の集まる気安い店だった。齢七十を過ぎて隠居。しかし、途端にご主人は体調を崩され、あれよあれよという間に旅立たれた。

長年連れ添ってきた連れ合いを亡くされた方は誰もが言う。

「そりゃあ、寂しいものだよ。いつも向き合ってご飯食べていた人がいないんだもの。隣で寝ていた人がいないんだもの」

言葉ではそう聞いていたが、日常の暮らしの中に刻まれた人の悲しみには、いまままで気付いてこなかった。しかし、そうだったのだ。

一年経っても、一人で帰る部屋が寂しくて灯りが消せない悲しみがある。氣遣ってくれる人はたくさんいても、静まりかえった部屋の空気が切なくてテレビを点けっぱなしにする孤独があるのだ。

人間は時として、みずから悲しむために人を愛し、傷つくために生きているのではないかと思ってしまうほど不条理な生き物だ。

しかし、不条理な存在であればこそ、仏さまの目にはきつと、けなげでいとおしい存在に映っているはずと私は思うのだ。

ある時、お釈迦さまは弟子の舍利弗に説き示された。

極楽浄土の仏さまは「無量」の光明を放たれるから阿弥陀とお呼びするのだと。阿弥陀の語源は梵語で無量を意味する「アミダ」に関連付けられるのだけれども、それにしてもなぜ光明が無量なのだろう。

姉妹が会話する姿を目にしながら、こんなことを考えた。

——部屋の灯りが消せなくとも、それが人間本来の姿に違いない。むしろ、愛する人とともに生き、ともに心通わせてきた証と思いたいもの。真つ暗闇では寂しくなるばかり。人は光の明るさから生きる勇気をもらっている。だから無理に消せなくていい。阿弥陀さまも私たち一切衆生に生きる勇気を与えようと光を放ち、何ものにも遮られることなく、どこどこまでも照らしていらっしゃる。それが阿弥陀仏と呼ばれる所以。そして光明の源は阿弥陀さまの涙。阿弥陀さまは、悲しさの余り部屋の灯りが消せなくなってしまうような人間の性さがを哀れんで、私たちのために涙を流されている。その慈しみの涙が無量の光明となって輝いている——と。

拡大解釈もはなはだしい私見だけれども、ご主人の三回忌には、そう話したい
 と思っている。

（浄土宗総合研究所 袖山榮輝）

人間を「全体」で見る 人間観・生命観

CAMUNet / 代替医療利用者ネットワーク

井上朝雄

代替医療の「代替」ということばの意味は、近代医学とは依って立つ考え方が違う医学・医療ということ——と、前回言いました。

どこがどんなふうに違うのか。ごく大づかみに言ってしまうと、近代医学の特徴のひとつは人間のからだを分子が集まってできている精密な機械だととらえるところです。これを「分子機械論」と言いますが、機械ですからほとんどんパーツに分解できます。まず頭・胴体・手足……と分けられますし、その中身も脳・臓器・血管……と分けられます。その結果、脳なら脳専門、心臓なら心臓専門と研究領域も細かく分かれました。いえ、この細分化はさらに進み、それらを構成する細胞、さらに今日では細胞の中にあり、わたしたち個々人の生命の暗号を記し

ているとされる遺伝子研究が盛んなことはみなさんご承知の通りです。

からだは機械であり、パーツから成り立っているのですから、治療はそのパーツを治せばいいわけです。胃が悪ければ胃薬を投与すればいいし、薬で間に合わなければ悪い部分をそっくり取り除いてしまう。あるいは交換可能ならば別のパーツと交換しよう、という考え方です。これらは研究と医療技術の進歩によって、相当な成果をもたらしました。

もうひとつは、ひとつの病気には特定できる原因があり、その特效薬があれば治る、という考え方で、「特定病院説」と言います。これも特定の病原菌によって引き起こされる感染症などには非常に有効で、戦後まもなくま

では死に至る病だった結核なども抗生物質ができたことで治るようになりました。もつとも、この感染症と特効薬というのはイタチごっこみたいなところがあり、いまだ拡大の一途を辿っているHIVウイルス（いわゆるエイズ）の特効薬は見つかっていませんし、近くは新型肺炎SARSの大騒動と、次々と新手の感染症が登場しています。

ともあれ、この二つに共通するのは、「悪い部分」や「病気の原因」さえ治せば、からだは健康を取り戻せる、という考え方です。

それに対して代替医療は、これもごくごく大まかな見方ですが、人間を「身体・精神・霊体の統合体」と見、わたしたちのからだにもともと備わっている「治癒力」を活性化させることによって健康を取り戻そうとするもの、とすることができるようか。ちなみに「霊性」というのは、英語のスピリットの訳語で、定義するのはなかなかむずかしいのですが、心理学者の河合隼雄さんの言う「平仮名で書く「たましい」にニュアンスは近いように思います（ちつとも説明になっていませんが……笑）。

つまり、人間というのはけっしてバラバラにしてとらえられるものではない。からだところを分けることはできないし、たましいというものとも切り離せない。さらに言えば、自分の存在とまわりの環境のあり方とを分けることもできない。生体というものは常にそれらを統合した中で生きているもの。だから、病気や病原菌だけを見るのではなく人間を見よう、という考え方です。このように、近代医学と代替医療とは基本的に人間観、生命観が違うのです。

こうした考え方を「ホリスティック」と言い、日本語では「全体的」「全体論的」と訳されます。面白いのは、このホリスティックの語源はギリシャ語で「全体性」を意味する「ホロス」ですが、ここから派生した英語に、「ヘルス＝健康」、「ヒール＝癒す」「ホールサム＝健全な」、そして「ホーリー＝聖なる」などがあることです。

とはいえ、近代医学と代替医療のどちらがよいか、という議論は不毛で、近代医学の領域のものは近代医学にまかせ、代替医療が向いているものは代替医療を、と使い分けていくことが賢明な方法であることは言うまでもありません。

民話

をたずねて

連載

田之久

石崎敬子



絵・石川忠夫

あつたつてんがなあ

あるところに、田之久という役者があつたつて。

ある時、芝居をしてもらいたいつて、山ひとつ向ここの村から声がかかったつて。田之久は衣装やらカツラやら詰め込んだ小さなツヅラを背負い、山道を歩いていたつて。

峠まで来ると、太い木が道に倒れてあつたつて。見ると、それは木ではなく、大きな蛇が横になって、ごーごーつて寝ていたつて。

田之久は、大蛇を起こさないようにそつとまたごうとしたが、踏んづけてしもつたつて。

「あいたた。誰だ」

大蛇は目を覚まして、鎌首をすつと上げたつて。

田之久は、

「わ、わしは、田之久つていうもんだ」

つて、震えながら言うたつて。

「そうか。狸か。いや、狸じゃどうしようもない。人間なら一口に吞んでやるが、狸なら吞むのはやめじや」

大蛇にそう言われて田之久は、ああよかった、助かった、と大きく肩で息をしたって。そうしたら大蛇が、

「やい、狸。俺は狸が化けるところを見たことがない。おまえ、ひとつ化けて見せれ」

って、言うたって。役者も化けるのが商売、田之久は嬉しくなったって。

「それでは、きれいな娘っこに化けまする。ちよつと後ろを向いていってくれ」

「よしよし」

って、大蛇は後ろを向いたって。田之久はツヅラの中から赤い着物を取り出し、娘のカツラをつけたって。

「もう、いいぞ」

大蛇が振り返ってみると、ほんにきれいな娘が立っておったって。

「おや、ほんにまあ、うまいもんだがなあ。さすがに狸だ」
って、感心したって。

「よし、今度は侍に化けて見せれ」

「んじゃ、また後ろ向いていてくれ」

田之久は、大蛇がまた後ろを向いている間に、刀を出して、ちょんまげをつけて、侍の姿になったって。

「もう、いいぞ」

大蛇がまた振り向いてみると、ほんに強そうな立派な侍になっていたって。

「おお、よう化けてくれた。狸は化ける名人って言うが、ほんのことだなあ」

って、大蛇はたいそう喜んだって。

大蛇をすっかり騙した田之久が、一息いれようとキセルに火をつけると、

「やめてくれ。煙草のヤニが身体についたら腐ってしまふ。俺は煙草のヤニと針が一番怖い」

って、大蛇が慌てて言うたって。

「へえ、こんなもんが怖いとは。おいらは金が一番怖い」

「うーん。狸、おまえは変なもんが怖いんだな」

民話

をたずねて



「金は世の中のいさかいのもとだから、金が一番恐い」

「そうか。それぞれ恐いもんがあるんじゃない。やい、狸、このことだけは人間に言うてくれるな、わかったな」

今度会ったときには、違ふものに化けて見せれ、そう言うて、大蛇は草むらの中は入って行つたと。田之久は、飛ぶようにして山を下りたつて。

村にたどり着くと、

「おまえさん、役者の田之久さんじゃな。無事でなによりじゃ。峠で大蛇に会わなかったかな」

つて村の衆が寄つて来たつて。

いや、実は、こうこう、こういうわけで大蛇を騙した、と田之久は一部始終を話したつて。

「そうか、その大蛇は村の者を吞み込む悪い奴で、いいこと聞かせてもらえた」

つて、村の衆は針と煙草のヤニをいっぱい集めて、山ん中の池へ行つて、針と煙草のヤニを投げ込んだつて。

そうすると、池ん中の大蛇が苦しがつて暴れたつて。池の水がバチャコン、バチャツコンつて、波立つほど暴れたつて。それを見た村の衆は恐ろしくなつて逃げ帰つたつて。

その夕方、田之久が村の衆の家に泊まることになり、囲炉裏ばたでいると、表の戸をドンドンドンと叩くもんがあつたつて。田之久が戸を開けようとした途端、

「よくも言うなつてことを言つたな。これでもくらえっ」

つて、大蛇が、戸にバリバリ、ジャラジャラーつて、大判、小判を投げつけたつて。

それで、田之久は一生安楽に暮らしたつて。その後、大蛇は池ん中で死んだつて。

いっちご、きっけろっぺんぐらりん



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会



●大安

〈特選〉

大安の今日購いにゆく祭下駄

片桐てい女

近づいてきた祭に、町内のあちこちで準備が始まっている。買いものの日は暦で調べてあって、今日が大安の日だ。祭下駄というが、その他のこまごまも含まれているのだろう。祭はもう始まっているのだ。

〈佳作〉

大安や野点の席の桜餅

佐藤 まり

大安や百歳祝う桜鯛

井村 善也

旅立ちの子に大安の日を選ぶ

谷 しげ子

●テープ

〈特選〉

種案山子テープの生みし風の音

浜口 佳春

鳥を遠ざけるのに案山子をしつらえる。畑の上には、きらきら光るテープを張りめぐらして、万全の態勢である。テープは風に鳴っ

て、その威力を発揮する。ここではその音が句の力になっている。

〔佳作〕

テープ投ぐる客船初夏の日のまぶし

増田 信子

母の歌納めしテープ若葉光

中島富士子

紅白のテープ巡らせお田植祭

河合富美枝

●自由題

〔特選〕

蝶々や道を問われて道連れに

中島富士子

たまたま行く先が同じ方角だったのだろう。道を聞かれて、途中まで一緒にしましょうということになった。蝶があたりに舞って天気はよい。すぐ友達のように話ははずむ。誰にでもありそうなことである。

〔佳作〕

焼香の肩に触れゆく落花かな

石原 新

高速道防音壁の蔦若葉

浜口 佳春

御仏に守られし日々花便り

清水 みね



編集部選

参加作品

大安

大安のよき日や新茶買戻る

大安のよき日待ち買ふまつり下駄

大安や斜めにかぶる夏帽子

大安を運び百寿の春の宴

大安吉日梅雨は気まぐれ嘆く母

大安と云ふ名に酔ひし四月かな

大安といふ日に逢ふ御来迎

大安や即入院の夏の午後

今日の日を母と迎えて大安日

テープ

津波来ると赤きテープの区域内

包み解くテープの柄の花菱

蚊遣火やテープの民話ランブ宿

春愁や読経のテープに犬の声

島の子の島離れゆく投テープ

新茶缶きりりテープを剥がす音

ガムテープばかり残りて暮の春

四月尽ビデオテープが伸びている

春深くテープに残る指の跡

卯浪かなテープ切る人新市長

春眠やテープきゆるきゆる巻戻す

春の煙テープに祖父の浪花節

自由題

菜の花や筑紫次郎の水はるか

ばた餅がどよりと届き四月馬鹿

新聞の切抜きの裏さくら咲く

彼岸会の大念珠繰る若き僧

石原 新

山口 信子

中島富士子

山本美代子

河合富美枝

大野 肇

新島 美知

富田 筆子

野島 葵

四方 遼

平井美津子

水越 藍子

阿川きみ子

佐藤 まり

増田 信子

山口 信子

浄土誌上句会の
お知らせ

題

棒

音楽

自由題

●季語ではありません

締切・六月二十日

発表・『浄土』二〇〇三年九月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんねネッ

①



かまち♡よろう



おばあちゃん



夜
寝顔



編集後記

びわの葉を煎じる母の姿かな 岱潤

妻の友人からこんな話を伺った。

小学校二年生の子供が仲良しのお友達からの手紙を放り投げて出て行つたので、何気なく読んでみると、そこには子供のかわいがついているぬいぐるみ「モモちゃんを殺してやる」と書かれていたという。大変ショックを受けた母親が、娘が帰ってきたときに「こんな手紙をもらって、何かあったの」と聞くと、「べつに、何もないよ」とショックを受けている感もない。納得のいかない母親がなおも聞きたですと、「こんな話は、学校では今、みんな言っているよ」と平然と言うのであると、そしてこの話を一緒に聞いていた児童館につとめている友人は、「そんな

こと今、日常茶飯事だよ」と話してくれた。子供たちは遊びながらちよつとしたことで頭になると、すぐに相手に対し、また相手のかわいがついているものに對して「殺してやる」と言い放つというのである。

これは今はやりのパソコンゲームの影響であることは明白だが、なんとも恐ろしい時代になったと思わざるを得ない。子供たちが遊びの中で残酷な言葉を使うことは、今に始まったことではないが、単純に使われていた言葉が、弱者をさして使われるようになったことに嫌悪感を感じる。子供たちは今、消去、リセット、殺すに差をつけることが出来なくなっている。(長)

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

六十九巻六月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十五年五月二十日
発行 平成十五年六月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八) 六九四七
FAX 〇三(三五七八) 七〇三六
振替 〇〇一八〇八八二八七



昭和16年11月号



昭和16年12月号



昭和17年1月号



昭和17年2月号



昭和17年3月号



昭和17年4月号



昭和17年5月号



昭和17年6月号



昭和17年7月号



昭和17年8月号



昭和17年9月号



昭和17年10月号



昭和17年11月号



昭和17年12月号



昭和18年新年号



昭和18年2月号

法然上人鑽仰会の

本



『念仏讀本』完全復刻版
1,600円



『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット) 800円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話 / 03-3578-6947

FAX / 03-3578-7036